

2022/6/19

ヨハネの黙示録 講解メッセージ⑬

『ヨハネの黙示録 3章 —ラオデキヤの教会（後半）—』

✠ あなたの安心の根拠とは

今日は、ヨハネの黙示録の中のラオデキヤの教会に宛てた手紙の後半から学びます。この手紙は、前半では「冷たいか熱いかであってほしい」と、見えるもので自分を飾りごまかして生きるのをやめ、現実の自分を見なさいと語られています。

「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」（黙示録 3:17）

ラオデキヤは、豊かな町でしたから、そこに住む人々は、日々の食事に困ることもなく、そこそこの貯金もあり、平和に安心して生きていけると思っていました。しかし、神の目から見ると、彼らはみじめで哀れで貧しくて盲目で裸だったのです。それは、彼らの平安の根拠にしているものが、すべて消えてなくなるものだったからです。

「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番優れているのは愛です。」（I コリント 13:13）

「信仰と希望と愛」は、すべて神との信頼関係を指します。イエス・キリストを知り、日々の関わりの中で増し加えていく信頼こそが、いつまでも残るものです。私たちの土台はイエス・キリストですから、その信頼関係はいつまでも残ります。それが、私たちの本当の安心の根拠です。

しかし、クリスチャンであっても、イエス・キリストとの関係を、ただ困った時に神頼みをするだけにとどめてしまい、現実の安心の根拠は見えるものに求めている人が多いのが現実です。決してそうであってはなりません。神のいのちによって造られ、イエス・キリストという土台の上に生きている私たちの生き方は、本物の安心の根拠である、イエス・キリストとの信頼関係を増し加えていく方向に向かうべきなのです。

「わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現さないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。」

(黙示録 3:18)

「火で精錬された金」とは、全き愛のことです。愛は、いつまでも残るものの中でも、最も大いなるものです。人間が考える愛には、常に条件が付きます。これは、不純物が混ざった愛であり、火で精錬された愛ではありません。しかし、神の愛は不純物が全くない純金です。それは、無条件であなたを受容する愛のことです。

あなたはこの世の条件付きの関わりを得て安心し、その愛で満足しようとしていないでしょうか。確かに人から良く思われると安心します。しかし、良く思われるために相手に合わせ、条件をクリアするよう一生懸命頑張るような関わりではなく、あなたを無条件で愛し無条件で受け入れる、神の全き愛を求めるべきです。この全き愛が恐れを締め出すのです。

「あなたの裸の恥を現さないために着る白い衣」とは、赦しの恵みのことです。「裸の恥」は罪を象徴しており、それを隠す「白い衣」とは、赦しの恵みです。この世界では誰もが罪人なのですが、良い行いをして人から良く思われることで自分の罪を隠し、私は良い人間です、頑張っています、という顔をして生きています。このように、自らの行いで自らの罪を隠し、それを心の糧とし、安心の材料とすることを、行いの義と言います。

しかし、イエス・キリストは、赦しの恵みによって罪を覆い隠しなさいと言っておられます。神は、一切条件を付けることなく、全き赦しを与えてくださいます。それが、イエス・キリストの十字架です。自分の努力や行いによってではなく、赦しの恵みによって、神があなたの罪を帳消しにしてくれる、それが白い衣です。神があなたを守り、弁護してくださる、ここに真の希望があるのです。

「目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい」とは、「真理がわかるようになるために、聖霊の助けを受けなさい」という意味です。私たちが、神の御心を知り、神のことばを信じられるようになるためには、聖霊の助けが必要です。人は、肉によって人を知ろうとします。肉とはうわべです。うわべではなく本質を見ること、それが信仰です。本質は、聖書に書いてあります。その聖書のことばを信じられるように助けてくれるのが聖霊です。

つまり、ここで語られているのは「愛と希望と信仰」についてです。愛と希望と信仰を求める者こそが富める者なのです。見えるもので自分を富ませ、見えるものに安

心を求めても、そんなものは無です。本当に富んで心の平安を得る ためには、愛と希望と信仰を求めなければなりません。それは、神との関わりです。それによって私たちは、真の平和を手にしていくのです。

✦ キリストの土台の上に

「私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」（I コリント 3:9-15）

私たちは神によって救われ、永遠のいのちを与えられています。その私たちは、地上で肉体の死を迎える日までどのような生き方をすればよいのでしょうか。まず重要なことは、私たちの土台はイエス・キリストであるということです。その土台の上に何を建てるか、それが私たちそれぞれの生き方になります。土台がイエス・キリストである以上、イエス・キリストとつながるものしか建てることはできません。それは信仰と希望と愛です。それ以外のものはすべて消えてなくなります。

「金、銀、宝石、木、草、わら」は、この世界の価値観を表しています。残念なことに、成功した人生とは、この世界で価値のあるもので自分の人生を建てることだと思っているクリスチャンが実に多いのです。この世界で一番になり、認められ、豊かになれば、人生は平安なのだと思われ、金でも銀でも宝石でも、とにかく何でもいいからこの世界の何かを手にして、心の平安を得ようとしているわけですが、それこそが、「自分は豊かで乏しいものはないと言っているあなたは、実はみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸であることを知らない」（黙示録 3:17）ということなのです。

あなたがキリストの土台の上に建てたものが本当に自分の安心であり宝だったのが、それは、終わりの日、すなわち肉体の死を迎える時、明らかになります。もし、あなたが建てたものが残っていれば、それは正しい宝を蓄えたということです。しかし、もし努力したものが何も残っていなかったとすれば、空しい人生だったと言わざるを得ません。ただ、たとえそうだったとしても、土台は残りますから、あなたは助かり、天国には行けます。

あなたは、イエス・キリストという土台の上に何を建てるのでしょうか。残るものを建てるのか、建てたものは失われ土台だけになる人生か、どちらを選ぶのかとヨハネの黙示録は問いかけています。

「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」（黙示録 3:19-22）

イエス・キリストという土台の上に間違っただけのものを建て、心の拠り所としているクリスチャンに対して、神は、彼らを愛するがゆえに叱ったり懲らしめたりすると言われます。

それはまず、律法によってです。神は私たちに「自分を愛するように隣人を愛せよ」「敵を愛せよ」等の実行不可能な律法を突きつけ、私たちの罪を明らかになさいます。こうして、あなたは罪人であるという現実を突きつけ、そこに目を向けるように導かれます。また、私たちが出会う患難をあえて静観することを通して、神は私たちに真理に導かれます。人にとっての患難とは、この世で手にした安心を失うことです。健康を心の安心の拠り所にしていれば、病気が患難であり、お金を心の拠り所にしていれば、富を失うことが患難です。それによって、あなたが拠り所とするものがあなたを救うのかどうか、神はあなたに確認させるのです。

つまり、「愛する者を叱ったり懲らしめたりする」とは、神の愛が私たちに絶望に追い込むことです。自分が安心だと思っている世界に対する絶望を味わい、自分は本当は裸だということに気づくなら、私たちは神の救いの御手にしがみつこうようになります。

ます。本当に絶望するなら、見えるものではなくキリストと結びつこうとするようになるのです。

すると、次に聖書は「だから、熱心になって悔い改めなさい。」と語ります。「悔い改め」と訳されている原語は「メタノエオー」です。これは、物理的に心の向きを変えろという意味で、反省するという意味ではありません。つまり、絶望に追い込まれたら、次にすることは、熱心になって心の向きを神に向けることなのです。私たちの安心は、この世界ではなく、神にあるからです。

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」（黙示録 3:20）

「メタノエオー」とは、神に対して心の戸を開けることです。神が私たちを責め続けるとは、心の扉をたたき続けるということです。

私たちは「罪」というと、悪事をイメージしますが、それは、聖書では「肉の行い」と呼ばれます。本当の罪とは、あなたの心の拠り所を見えるものに求めることです。ですから、悔い改めとは、心の拠り所を神にすることなのです。

この世での最も大きな安心、心の拠り所は人です。人から愛されること、ほめられること、認められることで、私たちは大きな安心を得ています。ですからイエスは、「この世の心づかい」を罪の筆頭にあげました。この世の心遣いによって人の歡心を買ひ、心の中の不安を打ち消そうとすることは、神に心に向けて平安を得ようとする行為とは真逆だからです。

イエス・キリストは、人がこの世で拠り所とするものとして、この世の心遣いと富と快樂を挙げられました。人の歡心を買ったり、お金に心が向いたり、楽しいことを探したりして、心の安心にしようとする生き方のことです。

このようにして見えるものに自分の安心の根拠を求めると、いつも人と比べて、嫉妬や憎しみが生まれ、人をだましたりうそをついたりしてしまいます。ですから、見えるものに自分の安心の根拠を求めることが罪であり、この罪によってさまざまな肉の行いが生まれるのです。つまり、罪の本質は、肉の行いではなく、心を神に向けないことなのです。

「みことばを聞きはしたが、とかくしているうちに、この世の心づかいや、富や、快樂によってふさがれて、実が熟するまでにならないのです。」(ルカ 8:14)

これが、罪の実体です。人のことを思うことが罪の実体であるとは、私たちは、なかなか気づくことができません。しかし、イエス様はペテロに次のように言っておられます。

「しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」(マタイ 16:23)

神のことを思わないで人がどう思うかを考えてしまうことが罪なのです。ですから、熱心になって心を神に向けよと言っておられるのです。

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(黙示録 3:20)

私たちが自分を苦しめる方向に進まないように、神は、私たちの心の戸を叩き続けておられます。その声を聞いて、熱心になって心の扉を神に開きなさいと神は語っておられるのです。そうすると、神は私たちと共に食事をすると言われます。これは平安の象徴です。「あなたが心の扉を開いてくれたら、私があなたの中に入って、真の喜び・平安を与えよう、そうすればこの世で与えられる平安は消えてなくなるんだよ」と、イエス様は語っておられます。「あなたは本当は豊かではなく、貧しいんだよ。本当にあなたを豊かにするのは私だから、私を中に入れなさい。そして私と食事をしようじゃないか。」これが、神が私たちに求めていることなのです。

神は私たちに、ただ神を知っているというだけで終わるのではなく、もっと深い関係を築こうと求めておられます。そのために、神はあなたの心の戸をたたき続けておられるのです。そして、次のように締め括っておられます。

「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」(黙示録 3:21-22)

勝利を得る者とは、クリスチャンのことです。神はクリスチャンたちを、神と共に神の座に着かせようと言っておられます。イエス様は弟子たちに、「私はあなたを友と呼ぶ」と言われました。イエス様は私たちの友になることを望み、「遠く離れていないで、もっと私に近づき、私と一緒に座に着きなさい」と語っておられるのです。イエス・キリストと友としての関係を築き、信頼を増し加えていくこと、これが、私たちクリスチャンが目指すべき方向です。

✕ 過去からの解放

人の苦しみというのは、すべて過去に起因します。過去に目を向け、「あの時、こうしておけばよかった」「今が悪い状況なのは、あの時の失敗のせいだ。」と後悔したり、人を赦せない、自分を赦せないと言って、人を憎み、自分を憎み、社会を憎み、過去のとりこになり、過去を生きたりしてしまうのです。それは、結果に心を奪われ、結果で人の価値を判断するからです。見える安心で過去の苦しみをごまかそうとしてはいますが、過去を変えることはできません。過去の傷を少しでも癒そうと、今度こそ失敗しないよう頑張ろうと努力して、見えるところを拠り所として生きている、これが私たちの現状です。

そこで神は、人をその過去から救い出すために、立ち上がってくださいました。冷静に考えてみれば、過去というのはすでに滅んだ世界です。つまり、過去に心を奪われて過去に生きるということは、あなたは死んでいるということです。すでに終わった死の世界が、私たちを苦しめているのです。これを罪と言うのです。なぜなら罪とは死だからです。心を過去に向けて過去に生きようとするのが罪なのです。

では、神はどのようにして、私たちを過去から引きずり出そうとするのでしょうか。それは、未来を持ってくることによってです。神と共に生きる素晴らしい未来の可能性を持ってきて、私と共に未来を生きようと、神は私たちを導いておられるのです。その未来と過去がぶつかる場所、それが「今」です。神は、これからあなたに何かをしてあげようと言っておられるのではなく、「今」を共に生きようと語っておられます。だから、「今は救いの時、今は恵みの日」(Ⅱコリント6:2)なのです。なぜなら、未来と過去がぶつかる接点は、「今」しかないからです。こうして神は今、あなたの心の戸をたたき続けておられるのです。

過去に心を開くとは、死に心を開くことであり、滅びに生きることです。未来に心を開くとは、いのちに心を開くということです。神が用意した未来を選びなさいと神

は語り、さらに、私たちがその未来を選ぶことができるように、赦しの恵みを用意してくださったのです。神は、あなたがもう過去に戻ることができないように、あなたの過去をすべて消して白紙にするから、未来を共に生きようと、24時間いつもあなたに決断を迫っておられるのです。

未来と過去の境目で、私たちは時には過去に吸い込まれてしまうこともあります。しかし、神は24時間心の戸をたたき続けておられます。その励ましによって、私たちは再び起き上がり、「神様、助けてください」と、神に心を向けることができるようになるのです。人はこれを繰り返して生きています。でも、神はいつも心をたたき続けてくださっているのです。いつでも神に心を向けることができます。だから、希望をもって生きることができるのです。何度失敗しても構いません。何度でも神の御手につかまればよいのです。そうこうしているうちに、私たちは神への信頼が増し加わっていきます。ですから、神は私たちが友と呼ぶと言っておられるのです。

これが、神が私たちに望んでおられる生き方です。私たちが過去に心を開くのか、未来に心を開くのか、それが問題です。過去に心を開くことが罪です。しかし、未来はいのちであり、神であり、そこに希望があります。ここに、信仰と希望と愛があるのです。神が用意した未来を選択すること、これが信仰です。信仰によって私たちは、神が用意した未来、永遠のいのちであり神の国でありすべてが益とされる素晴らしい約束をすでに手にしているのです。イエス・キリストの十字架の贖いによって示され、復活によって明らかになったその未来を、私たちは共にキリストと共に生きていくのです。

あなたを苦しめる過去は赦され、帳消しにされたから、過去に心を開くことをやめ、神と共に前を見て生きていきましょう。